

編集後記

本学は、平成二十五年度から継続して推進してきた古事記学事業を基盤として、平成二十八年度に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育発信―として選定された。本号は、ブランディング事業開始二年目の成果論集にあたる。

創刊号より継続する『古事記』の本文・注釈は、上巻の「天の石屋」から「八俣の大蛇退治」までを掲載することができた。この注釈は谷口雅博センター長を中心とする本文校訂グループによるものである。また本年度からは、定例研究会の時間が限られているため、前段階として本文校訂グループによる検討会を踏まえ校訂・注釈が行われている（詳細は『古事記』注釈凡例を参照）。

定例研究会では『古事記』注釈の検討のほか、各分野からの研究発表も行われた（詳細は『機構ニュース』または

ブランディング事業二十九年度報告書参照）。ブランディング事業へと移行したことにより、研究組織として、I本文校訂・注釈史研究、II国際研究・発信、III教育研究・発信の三つを立てた。本号に掲載する、新井氏の論考はIグループからの考察であり、大塚氏、土佐氏の論考はIIIグループからの考察となる。IIIグループは「次世代に語り継ぐ」ことを担う部門であり、今後さらに活動を充実させて行きたい。

研究発信としては、毎年開催している国際シンポジウムがある。昨年度はブランディング事業に移行して最初の国際シンポジウムであり、「神話の詩学―舞・歌・型―」と題し、平成二十九年二月二十一日（土）に本学百周年記念講堂にて開催された。本号には、登壇した三名の発表を講演録として掲載し、当日の進行であった平藤氏による総括を掲載した。神話をテーマとした二部構成のシンポジウムであり、第一部には福岡県宮地嶽神社より宮司の浄見讓氏ほか舞い手の人々を招き、ツクシ舞の解説と実演が行われた。

当日は約二五〇名の来聴者が訪れ、盛況のうち幕を閉じた。ツクシ舞の様子までは本号に掲載することが叶わなかったのが残念である。

このほか本号には、本事業の成果として敷田年治『古事記標注』の翻刻と研究を継続して掲載した。また『古事記』の英訳も掲載するに至っている。この英訳については、既刊の『古事記学』に掲載された『古事記』注釈を英訳したものであり、注釈まで含めた英訳として海外でも認知されてきているようである。なお、前号に掲載した『古事記』英訳については本事業のホームページでも公開した。アクセスの利便性を高めることで、海外の『古事記』研究への寄与を図った。本号に掲載できなかった本年度の事業については、次号に掲載予定である。ブランディング事業は五カ年計画であり、次年度ははやくも中間総括の年にあたる。次号は中間総括の成果報告としても、これまで以上に充実した内容を目指していきたい。

（渡邊）